

渥美国際交流財団  
海外学会派遣プログラム参加報告  
ヴィグル・マティアス

2013年7月14日から28日までの2週間、渥美国際交流財団の海外学会派遣の助成を頂き、イギリスに行ってきた。イギリスへの旅の目的は中医師のためのサマースクールと、第24回国際科学史・技術史・医学史会議に参加し、資料の研究調査を行うためであった。

7月14日にニューアーク・リバティイ国際空港で飛行機に乗ってイギリスに行った。過去の二年間はポストドクターとしてプリンストン大学の東アジア学部に務めたが、6月30日に契約が終りアメリカに戻らない計画であったので、大きいスーツケース2つ、リュックサック2つ、パソコンケースと手持ちの袋にこの2年間でできた荷物を目一杯詰めてアメリカを出た。プリンストンに住んでいたアパートからロンドンの宿泊先まで電車・バスの乗り降りや地下鉄の階段の上り下りなどの際には荷物が重くて大変苦労した！

このイギリス旅の最初の目的はロンドンのウェストミンスター大学で開催された中医師のための第一回東洋医学サマースクール (EASTMEDICINE Summer School) に参加した。このサマースクールでは2週間にわたり毎日午前と午後3時間、何人の専門家によって中医学あるいは日本の漢方医学について歴史的かつ臨床的な授業が行われた。

私も針灸の経絡説を中心に近代以前の日本における中医学の受容について二つの講義をした。いつもアカデミックな聴衆の前で発表するが、今回の対象者が臨床家ばかりであったので、普段と違う質問とコメントが出されて面白い経験であった。自分の講義が終っ

た後、他の先生の講義を聞いたり、猛暑のロンドンでぶらぶらしたり、大英図書館で資料を閲覧したりした。

せっかくイギリスまで来たので、日帰りでブリストルに行き、ブリストル大学のロボティクス研究所で務めている Evgeni Magid (2010年度ラクーン) も訪ねた。会うのが2年ぶりで、市内の最も有名なところを親切に案内してくれた Evgeni と Tanya (奥様) に大歓迎された。お昼ご飯の直前にブリストル橋の向かい側にあるレストランのテラスで渥美国際交流財団の奨学生時代を懐かしく思いながら再会のカンパイをした。



マンチェスターで開催される第24回国際科学史技術史医学史会議に参加するため、21日に電車に乗りロンドンからマンチェスターへ移動した。一週間にわたり合計411のセッションで1758人の参加者が集まるこの会議は科学史の分野では一番大きい学会と言われている。報告は殆ど西洋科学史、技術史と医学史についてであるが、毎会議セッションの一部はアジアを研究している専門家に割り当てられている。私もフランス国立科学研究センターの研究所の所長が企画した「古代から伝統へ：東アジア科学・技術・医学における革新と過去(17~20世紀)」

(From Antiquity to tradition?  
Innovation and the past in East Asian science, technology and medicine (17th -

20th centuries)というセッションで「針法に適応されている解剖医学：19世紀の日本医学における伝統の中の革新 (Western Anatomy Applied to Acupuncture: Innovation within Tradition in Early Nineteenth-Century Japanese Medicine)」演題の発表をさせてもらった。

会議が一週間続いたが、途中で2日間学会を休み、ジョン・ライランズ図書館 (The John Rylands Library) を訪ねた。この図書館は市中にあるネオ・ゴシック建築の建物で、断片のみ残る最古の聖書のパピルスなど珍しく貴重な書籍が保管され、ヨーロッパには歴史のある有名な図書館である。一般閲覧室に入ると、普段書棚に並べている古い書籍が特別展示され、蔵書を閲覧する人もおり、ハリー・ポッターの魔法学校のような雰囲気であった。私も紹介状を持って日蘭関係の資料を調査するために4階にある貴重書閲覧室を利用させてもらった。今回の調査の目的はオランダ学者・医者であるイサーク・ティチング (Isaac Titsingh) が残された自筆ノートを調べることであった。1779年から1784年の間オランダ商館長として日本に滞在したティチングは鍼灸に関心を持ち、現存する鍼灸関係彼のノートはジョン・ライランズ図書館に所蔵されている。今回の短い滞在で熟覧する時間があまりなかったので、資料の写真の撮影のみこの2日間を過ごした。

この大規模な会議に出て同じ分野を研究している研究者との交流、一流の学者の発表を聞くなど、さまざまな刺激を受けて、満喫できた。会議が終る一日前にフランスの実家に帰った。

そして二週間後には、浙江大学の跨文化研究所に就職した。

渥美国際交流財団の海外学会派遣プログラムののおかげ今回のイギリスの旅

は充実し、大きな成果を得ることができ、ここに渥美国際交流財団に心から感謝する。



ジョン・ライランズ図書館  
(The John Rylands Library)

